

第2章 農業の概況

1. 農業事情

1967年にイスラエルにヨルダン川西岸を占領され国土面積が大幅に減少したことに伴い、耕作に適した土地は大幅に減少した。それでも、「ジョ」国政府は農業奨励政策を取っており、主要食糧作物である小麦については、「ジョ」国政府が市場価格よりも高い価格で農民から買い取る施策を行っている。また、GDPに占める農業生産高の割合を上げるため、ピスタチオ、デーツ（ナツメヤシ）、サボテンの実等、比較的高値で輸出できるものについては新栽培技術を導入し、収穫を上げようとしている。一方で、「ジョ」国には200万頭のヒツジと6万頭のウシが飼われ、また、2,074の牧場から年間14万3,000tの食肉が、272の牧場で年間9億1,700万個の鶏卵が産出されている。しかし、これら家畜類のエサとなる牧草の栽培を確保することも切迫した課題となっている。

「ジョ」国の農業発展にとって最大の障害要因は降雨量が少なく、不安定なことである。国土の約90%が年間降水量200mm以下の半乾燥地帯に属し、国土面積の約2.7%(約24.4万ha)が可耕地である。このため農産物の安定的生産を確保するためには灌漑が必須条件となっている。現在、ヨルダン川支流のヤルモク（Yarmouk）川、ザルカ（Zarqa）川及びいくつかのワジ（季節河川）から取水して、ヨルダン渓谷の圃場を中心に灌漑が行われているが、灌漑面積は全耕地面積の約29.4%に過ぎない。

1997(平成9)年11月に実施された食糧増産援助現地調査の結果によると、1997年の水供給資源量（地表及び地下水に供給される量）は年間1,234百万tと見られている。水の消費量は生活用水、工業用水等も含めて年々確実に増加することが予想されており、2000年には1,045百万t、2020年には2,145百万tの需要が生じるものと試算されており、今後は少ない水資源の中での農業用水の確保が重要な課題となっている。また、同調査では地下水の利用を更に図る必要があるが、水量が少ないうえに塩分混入等の問題もあって、多くを期待できない状態にあることも報告されている。

「ジョ」国は、可耕地が国土面積の約2.7%である24.4万ha（1999年）と限られるが、農業人口が56.1万人(1999年)と相対的に多く、農地の細分化が進み農家1戸当たりの土地所有面積は平均約1.8haとなっている。また、農業労働力の点では「ジョ」国は農作業を雇用労働者に多く依存しており、その多くを海外からの出稼ぎ労働者が占めている。1999年の同国農業統計によると、農業人口のうち11%に相当する6.2万人が海外からの労働者である。

2. 主要食糧生産事情

「ジョ」国における2KR対象作物は、気候・土壌が適しているジャガイモ、小麦、レンズ豆であり、これらの生産状況（生産量、収穫面積、収量）は表2-1に示すとおりである。

表2-1 主要食用作物の生産状況

作物名		1989-91年	1996年	1997年	1998年
ジャガイモ	生産量（千t）	59	158	107	110
	収穫面積（千ha）	3	4	4	4
	収量（t/ha）	23.17	35.69	24.94	25.59
小麦	生産量（千t）	66	43	57	55
	収穫面積（千ha）	54	28	56	56
	収量（t/ha）	1.22	1.51	1.02	0.99
レンズ豆	生産量（千t）	2	2	2	2
	収穫面積（千ha）	3	4	3	3
	収量（t/ha）	0.65	0.53	0.63	0.63

（出典：FAO Yearbook 1998）

1998年の「ジョ」国における小麦の生産状況を見ると、その単位面積当たりの収量は約1t/haとなっており、同年の世界平均値（約2.6t/ha）の半分以下となっている。またレンズ豆についても、その収量は世界平均値（約0.88t/ha）の約72%に留まっている。一方、対象作物の中では最も気候、土壌等、栽培環境が適したジャガイモの収量に関しては、世界平均値（約16.1t/ha）を上回っている。生産量は、国土の大部分が砂漠地帯で耕地面積が少ないことから全体的に少なく、国内の需要を満たす状況には至っていない。特に主食である小麦の自給率は約8.7%と非常に低い水準にとどまっている。

「ジョ」国における主要食糧の需給状況を表2-2に示す。

表2-2 主要食糧の需給関係（1999年）

作物	生産（千t）	輸入（千t）	輸出（千t）
ジャガイモ	96	35	8
小麦	9	413	3
レンズ豆	5	28	0

（出典：FAOSTAT）